

森林と生きる

10・11全国育樹祭・岐阜

重なり合つ枝に日差しが遮られ、薄暗い。木の根はむき出しになっている。

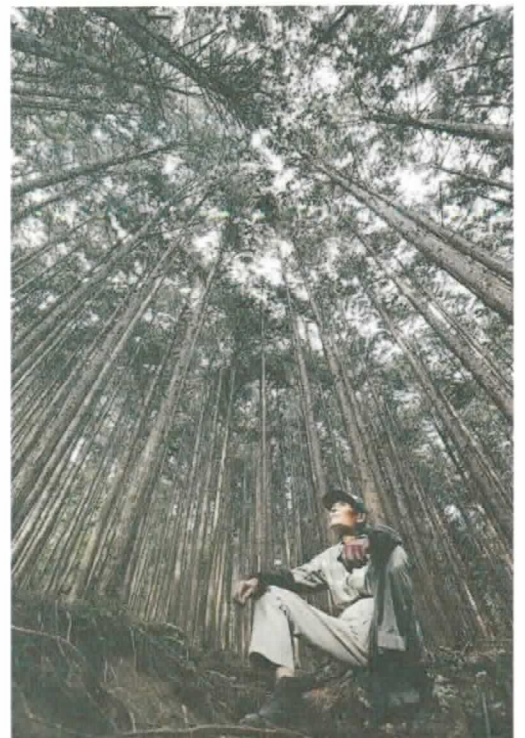
恵那市中野方町のヒノキの森。樹齢は約五十年という。本来なら伐採に適した時期だが、幹の太さは二十年前後とずいぶん細い。太くて建材に適した木に育てるには、周囲の木を間引く間伐が必要なのに、手が入っていない所が多い。「木は金にならんと、放置する山主が増えてまった」と、近所の農林業池戸善男さん(せし)は嘆く。間伐を続ける山主



① 荒 廃

は、池戸さんを含め少数派になった。中野方の森の七割はヒノキやスギの人工林。一九五〇(昭和二十五)年から七〇年ごろにかけ、

人が去りやせる木々



森でヒノキを見上げる池戸善男さん。間伐されていないため、幹は細く根がむき出しになっている＝恵那市中野方町で

日本の森林と林業従事者林野庁によると、国内の森林は2012年現在で、約2500万畝。戦後の造林で、木の量を示す「森林蓄積」はこの半世紀で2.6倍になった。林業従事者は1980(昭和55)年には約15万人いたが、10年には約5万人に減少した。うち65歳以上は21%。平均年齢は52・1歳と、全産業平均の45・8歳より高い。

盛んに植えられた。

造林は戦後の国策。戦時中は物資不足で木は切られ、はげ山が増えた。緑化と戦後復興の木材需要を満たすため、国は建材に適した針葉樹のスギやヒノキの植樹を推奨した。

中野方でも無料で苗が配られ、住民総出で植樹。クヌギやコナラなどの広葉樹を切り、植え替えた。「木は財産」と信じて水田をつぶし、歩くのも容易でない急斜面に

も植えた。池戸さんも時

見放された木々は細くても成長を続ける。日本の森は今、有史以来最も木があふれかえっている。

森を放置し続ければ、木の価値はさらに減る。地盤の保水力も低下し、土砂災害も起きかねない。その悪循環を止めようとする工夫の一つだ。

揖斐川で昭和天皇がスギを植えてから五十八年。県は「間伐の時期に重なるため」と説明するが、林業関係者は言う。「時代を象徴している」

しかし、八〇年以降、円高で安い輸入材が流入し、国産材の価格は下がりは始める。パプル期にやや持ち直したが、それが終わると、木材需要そのものが低迷した。ヒノキの価格は最も高かったころの三分の一以下に。林業をやめ、都会に出る人は増え、中野方の人口も五五年ごろの約三千人から半減した。

中野方では数年前から、山主ら有志十七人が休日に間伐をしている。

中野方では数年前から、山主ら有志十七人が休日に間伐をしている。

国土の六割を占める森林。その恵みを受け、私たちは生きてきた。今、森はどんな課題に直面しているのか。全国育樹祭を前に岐阜、愛知、三重の各県を歩いて、探った。

中野方でも無料で苗が配られ、住民総出で植樹。クヌギやコナラなどの広葉樹を切り、植え替えた。「木は財産」と信じて水田をつぶし、歩くのも容易でない急斜面に

も植えた。池戸さんも時

見放された木々は細くても成長を続ける。日本の森は今、有史以来最も木があふれかえっている。

森を放置し続ければ、木の価値はさらに減る。地盤の保水力も低下し、土砂災害も起きかねない。その悪循環を止めようとする工夫の一つだ。

揖斐川で昭和天皇がスギを植えてから五十八年。県は「間伐の時期に重なるため」と説明するが、林業関係者は言う。「時代を象徴している」

が担当します)

森と生きる

10・11全国育樹祭・岐阜



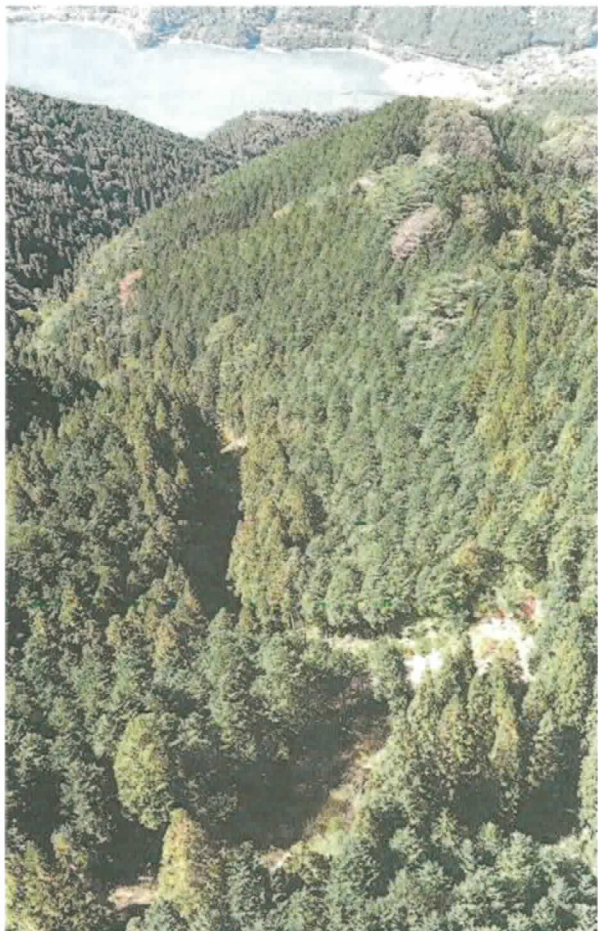
間伐はされているのか。日差しは地面に届き、下草は生えているのか。

長野、岐阜、愛知県にまたがる矢作川上流域のスギやヒノキの人工林約六万畝を、愛知県豊田市に拠点を置く市民グループ代表丹羽健司さん(左)と恵那市岩村町は歩いて調べた。岐阜市域の三倍の広さに相当する。

「森の健康診断」と銘打ち、二〇〇五年から一四年まで毎年一回、ボランティア約三百人と森に入った。



代償



放置が招く災害危機

年九月の東海豪雨。矢光一郎東京大学院准教授(四)を知り、一緒に調査を始めた。加わったボランティアの中には、豊田市の職員もいた。市幹部も関心を寄せ、市は〇七年、調査結果を生かそうと条例を制定。防災目的の間伐促進を掲げた。

「四方ごとに調べ、全体の六割強は間伐をしていないことを把握した。木々が密集し、地面に十分な草が生えておらず、大雨で土砂が流出する恐れがある。調査のきっかけは〇〇

「森を放置したせい」。林業関係者は声をそろえた。が、誰も流域の実態は知らなかった。「自分たちで調べられないだろうか」

所有者の了承を得て、森林組合が間伐し、費用は市が負担する。少しづつ進んでいるが、障害も

「木材価格が低迷した末の森への無関心。これが災害の危機を高めている」

丹羽さんは六月、広島市安佐北区を訪ねた。昨年八月、土砂崩れが多発し、犠牲者が出た地域。「森の健康診断を教えてください」と、地元のエリート松山将大さん(三)に招かれた。

「森の健康診断」と銘打ち、二〇〇五年から一四年まで毎年一回、ボランティア約三百人と森に入った。

「森の健康診断」と銘打ち、二〇〇五年から一四年まで毎年一回、ボランティア約三百人と森に入った。

「森の健康診断」と銘打ち、二〇〇五年から一四年まで毎年一回、ボランティア約三百人と森に入った。

「森の健康診断」と銘打ち、二〇〇五年から一四年まで毎年一回、ボランティア約三百人と森に入った。

「森の健康診断」と銘打ち、二〇〇五年から一四年まで毎年一回、ボランティア約三百人と森に入った。

そう唱える丹羽さんから調査のノウハウを学んだ地元住民たちは十一月、再び森に入る。

①森に残る土砂崩れの跡(手前)。2000年9月の東海豪雨で発生したとされる。奥は矢作ダムの湖=愛知県豊田市牛地町で(本社へリ「おおづる」から) ②東海豪雨の影響で、流木で覆われた矢作ダムの湖面=豊田市矢作川研究所提供

森と生きる

10・11全国育樹祭・岐阜

三重県松阪市の松阪飯南森林組合の材木置き場。近所の農林業松本長巳さん(左)が、軽トラックに丸太を積んでやって来た。

切り出した間伐材で三百キ余。太さや曲がり具合から建築材には適さず、本来は一銭にもならないが、今は組合が、一ト六千円で引き取ってくれる。

間伐材を燃やして水蒸気を発生させ、タービンを回す木質バイオマス発電所が、昨年十一月から市内で稼働。その燃料を組合が提供している。松本さんは「今まででは、みだった間伐材で、月四〜五万円の収入になる。ありがたい」と言う。

Ⓣ 未来

木質バイオマス発電は二〇一二年三月の東日本大震災と原発事故を機に、再生可能エネルギーとして注目された。国は、建築材に適さない間伐材を燃料にしようという計画。一二年七月、太陽光とともに木質バイオマス発電にも、電気を固定価格で電力会社が買い取る制度を導入した。商社などが発電所を建設。現在は瑞穂市など全国二十六カ所まで動いており、他に八十カ所以上で計画されている。しかし、課題はある。

木材利用どう増やす



木質バイオマス発電の燃料にする間伐材を、軽トラックの荷台に積む松本長巳さん＝三重県松阪市飯南町粥見で

国内では、切った木をふもとの材木置き場まで運ぶための人件費やガソリン代などが、おおむね一ト当たり八千〜一万円かかると思われる。木を燃

料として買ってもらえる。価格は一ト当たり六千〜七千五百円なので、建築材として使える間伐材を出荷しないと、赤字になる。

低迷する建築材の価格が上昇に転じない限り、間伐意欲の向上に過大な期待はできず、発電所が増え続けると燃料不足になる、との見方は有力。津市や愛知県半田市では、海外産の安い木くずを燃料に想定した発電所も建設される。結局、林業再生には、建築材の需要拡大が不可欠なのだ。

一〇年、公共建築物での木材利用を促す法律が成立。国や地方の役所、学校などをできるだけ木で造る方針が盛り込まれた。松阪の松本さんは体が動く限り、間伐を続けるつもりだ。利益はわずかでも「親から贈られた財産は守りたい」と思うから。会社勤めの一人息子(三〇)に自らチェーンソーを持ってとは言わないが、山主として、森を受け継いでほしい。

育ててきた木々がいつか、だれかの家になり、喜んでもらえたら。そう願っている。

(この連載は小川慎一が担当しました)